湘南医療大学　ティーチング・ポートフォリオ

湘南医療大学　保健医療学部　看護学科
教授　片山 典子
（2026 年 5 月 26 日作成）

1.　教育の責任

湘南医療大学（以下「本学」という。）は「人を尊び、命を尊び、個を敬愛す」をもって建学の理念としている。

こうした理念を基盤として、「継続的学習力、想像力、そして課題解決能力を育む「幅広い教養教育」と、エビデンスに基づいた専門知識・技術の修得を基盤とした「人権や生命の尊厳を慈しみ、感性を享受するための専門教育」を追求し、責任感と使命感を持って自律的、主体的に実践能力を発展させていける医療従事者の養成」を目指している。

本資料作成者である片山典子（以下、作成者）は湘南医療大学の理念のもと保健医療学部看護学科の教員として、以下の授業科目を担当している。各授業のシラバスは湘南医療大学WEB ポータル上で公開されている。

表 1. 保健医療学部　看護学科　担当科目

科目名	対象学年	前期・後期・通年	必修・選択	単位
精神看護学	2 年	後期	必修	1
精神看護方法論	3 年	前期	必修	1
チーム医療論Ⅱ	4 年	後期	必修	1
病態学Ⅳ	2 年	後期	必修	1
生涯発達看護論	1 年	後期	必修	1
保健医療看護の最前線	4 年	前期	選択	2
プロフェッショナル論Ⅲ	4 年	後期	必修	1
ナーシングプロセスⅡ	3 年	前期	必修	2
看護応用ゼミ	4 年	通期	必修	2
統合実習	4 年	前期	必修	3
慢性期看護実習	3 年	後期	必修	6

表 2. 大学院　修士課程　保健医療学研究科　担当科目

科目名	対象学年	前期・後期・通年	必修・選択	単位
精神保健医療学特論Ⅰ	1 年	前期	選択	2
精神保健医療学特論Ⅱ	1 年	前期	選択	2
精神保健医療学演習	1 年	後期	選択	4
多職種協働・地域連携特論	1 年	後期	必修	2
健康増進・予防特別研究	1～2 年	通年	選択	10
コンサルテーション論	1 年	後期	選択	2
フィジカルアセスメント	1 年	前期	選択	2

表 3. 大学院　博士課程　保健医療学研究科　担当科目

科目名	対象学年	前期・後期・通年	必修・選択	単位
保健医療学基盤研究	1 年	後期	選択	2
保健医療学実践研究	1 年	後期	選択	2
地域生活ケアシステム学特論	1 年	前期	選択	2
地域生活ケアシステム学演習	1 年	後期	選択	4
看護学特別研究	1～3 年	通年	選択	10

2.　私の理念・目的

1)　私の理念

湘南医療大学保健医療学部看護学科のめざす教育は、「広い視野で人間を理解できる教養を備え、専門職業人としての倫理観を育み、科学的根拠に基づいた看護を実践できる基礎的能力および、地域・社会に貢献できる能力を持つ人材の育成」を目的としている。

私は社会の変化とともに国民の医療に向けられるニーズは変化すると考えている。その変化に応じた専門職業人に求められる豊かな教養と臨床に根ざした社会的な責任と倫理観を有している看護師を育成する必要があると考える。特に私が担当している精神看護学が対象とする範囲は、あらゆるライフサイクル、あらゆる状態にある人である。取り扱う内容は心の発達から精神的健康の維持・増進・危機への対処、さらには精神を障害された対象の治療的な看護、再発予防、回復促進、社会生活を営む支援、家族看護までを含む広範囲なものである。そのためには、システム理論に基づいて、生物学的側面、心理的側面、社会的側面が相互に関連しあい、全体として(統合的に)対象を捉えて看護する知識・技術が必要と考える。また看護実践には科学的根拠が必要であり、専門職業人としての倫理観を持ち、地域・社会に貢献する能力を持った看護師を育成したいと考える。

2)　理念をもつに至った背景

前項で述べたように精神看護学の対象とする範囲は、広範囲である。また対象をシステム理論に基づいて、生物学的側面、心理的側面、社会的側面が相互に関連しあい、全体として(統合的に)対象を捉えて看護するバイオサイコソーシャルアプローチが必要と考えている。これは、世界的にこのようなアプローチが必要であると 1980 年代頃からいわれ、科学的根拠も十分にある。将来の看護を担う学生には、今求められている看護を教授する必要がある。そのため前項の理念に至った。

3.　教育の方法・戦略

このような理念・目的を実現するために、様々な方法が考えられる。私が実践している

方法・戦略を述べたい。

1）精神看護学を学ぶ学生の特徴をふまえた教授方法

精神看護学を教授する際は、次のような学ぶ上での特徴があると考える。

１）精神障害者への偏見、怖さ

２）精神障害者と関わった経験がない、乏しい

３）現象を伝えにくい

そのため、学内での教育方法には「Theory」「Real」「視覚などの五感を使った教材」「アクティブラーニング」を教授行動に取り入れている。

具体的には下記の内容になる。

表 4. 教授行動

Theory	精神看護学の基盤となる理論家の理論・モデルを教授し、科学的根拠を持ちながら実践できるようにする。
Real	理解しにくい現象を捉えられるように Real な事例やシミュレーションを活用し、教授する。
五感を使った教材	映像、画像、音声等を活用し、イメージできるように教授する。
アクティブラーニング	授業の中でアクティブラーニングを取り入れ、体験しながら学習できるように教授する。

2）経験型実習教育を主にした実習教育

経験型実習教育とは、学生が主に臨地実習場面での経験を振り返り、「リフレクション的経験」として自らの経験を意味づけていく力をはぐくむことを支援する教授法をいう。経験型実習教育においては、学習者を成人ととらえ、「おとなの学び」と称される成人教育学（Andragogy）の理論に即している。まさに成人教育である看護基礎教育に適しているといえよう。また経験型実習教育に導くための３要素である「オープンリード」「リフレクションを実施する」「Ｉ’メッセージ」を大切に教授している。

３．学内・学外で得られた情報を教育活動に活用

本学での授業の他に、以下のような活動を通して、学内・学外で得られた情報を教育活動に活かしている。

1） 各種委員会（教務委員会、他）

2） 「JAPAN JORNAL OF NURSING SCIENCE」査読委員

3） 「Journal of International Nursing Research」査読委員

4） 日本精神保健看護学会　学術連携委員

5） 日本アディクション看護学会 副理事長

6) 第23回日本アディクション看護学会学術集会　企画・実行委員

7) 第24回日本アディクション看護学会学術集会　大会長、企画・実行委員

8) スーパーバイザリー精神科事例検討会　役員（広報委員）

9) 各種研修・講習会講師（日本精神保健看護学会主催の講師等）

10) 令和2年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究
「臨界期にある統合失調症を訪問する訪問看護師の自律性を高める教育プログラムの開発」研究代表者

11) 令和4年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究C
「若者のインターネット依存傾向におけるメンタルヘルスリテラシー教育プログラムの開発」研究分担者

12) 令和5年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究C
「臨界期統合失調症者に対する訪問看護師の家族支援における強化プログラムの開発」研究代表者

13) 令和7年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究C
「ICT版薬物依存症者に対する重症化予防PA（Physical Activity）プログラムの開発」研究分担者

14) 論文発表「システマティックレビューに基づいた新人看護職のメンタルヘルス支援プログラムの開発」
共著者：片山典子、川本利恵子、渡部李菜、陶山克洋、大胡晴香
令和4年4月　インターナショナルNursing Care Research 第21巻1号P31-40

15) 論文発表「高齢者虐待の共依存ケースへの援助の実際―高齢者虐待に対応する援助職へのインタビュー調査から―」
共著者：松下年子、片山典子、片山直子
令和4年10月　日本アディクション看護学会誌　第19巻2号P22-39

16) 論文発表「思春期における社会的ひきこもり傾向とインターネット依存の関連」
共著者：玉田聡史、片山典子
令和4年10月　日本アディクション看護学会誌　第19巻2号P10-21

17) 論文発表「学校におけるメンタルヘルス教育の普及啓発活動に取り組む親の行動体験と心理の過程」
共著者：上松太郎、松下年子、片山典子
令和5年9月　日本アディクション看護学会誌　第20巻2号P11-22

18) 論文発表「運動介入が物質関連障害者の自尊感情や自己効力感を高める効果：スコーピングレビュー」
共著者：小野寺悠斗、佐々木博之、片山典子
令和6年6月　日本アディクション看護学会誌　第21巻1号P17-24

19) 論文発表「Development of an Assessment and Response Competency Scal for Co-

dependence Cases of Elder Abuse」
共著者：Toshiko Matsushita, Yuriko Tanabe, Noriko Katayama
令和 7 年 4 月　日本アディクション看護学会誌　第 22 巻 1 号 P15-26

20）論文発表「COVID-19 拡大に伴う 1 型糖尿病患者の心身への影響に関する研究～マイクロブログによる計量テキスト分析を用いて～」
共著者：陶山克洋、片山典子
令和 7 年 10 月　日本アディクション看護学会誌　第 22 巻 2 号 P11-23

21）論文発表「精神看護学実習において学生が捉える地域生活支援に関する学び―テキストマイニングを用いたレポートの内容分析―」
共著者：片山典子, 渡部李菜, 陶山克洋, 佐々木博之
令和 8 年 4 月　日本健康医学会雑誌　第 35 巻 1 号 P99-105

22）論文発表「Evaluating a Group CBT Program Intervention for New Nurses Affected by COVID-19」
共著者：Noriko Katayama, Katsuhiro Suyama, Rina Watanabe, Rieko Kawamoto
令和 8 年 5 月予定（in press）　日本職業・災害医学会会誌　第 74 巻 3 号

4. 学習成果

本学では、学生による授業評価アンケートを実施している。2025 年度に作成者が科目を担当していた「精神看護方法論」の授業評価アンケートの総合評価（5 点満点）は 4.49 で、この総合評価は学科平均の 4.42 よりも高い評価であった。

アンケートでは、授業に対する意欲、内容の理解、考え方・知識・技術などの向上、自発的な学び、探求する力、教員の熱意、教え方、コミュニケーション、板書・配布物等、勉学環境に関する 10 の質問が設けられている。10 の質問のうち 4 つの質問おいて学科平均点以上の評価となっている。

最も高評価であった質問は「教員に熱意は感じられたか」であり、4.50 であった。次いで評価が高かった質問は「板書・配布物・掲示資料は読みやすいか」であった。この結果の要因としては、学生の理解度に合わせた説明を行うように努めた点や、学生からの質問に対する迅速かつ丁寧な対応など、学生一人ひとりの学びに寄り添った姿勢が評価につながったと考えている。授業資料に関しては、理解度が高まるようレジュメの内容をブラッシュアップしている点や、知識の羅列にとどまらず社会のトピックスと結びつけることを意識した内容となっていたことが高評価に結びついたと捉えている。「教員はコミュニケーションをとる工夫をしていたか」関しても評価が高く、一方向的な講義形式だけでなく質問時間を設ける等、双方向となるような授業設計や、授業時の表情や声のトーンなどの非言語コミュニケーションを工夫している点が評価されたと考える。「考え方・能力・知識・技術などが向上したか」については、アンケートの自由記述において「グループワークの取り組みやすさ」や「活発な意見交換」が評価されており、協働学習の場が学生個々の能力を向上させていたと考える。講義を聴くだけの受動的な学習にとどめず、得た知識をグループワークで他者に説明し、異なる視点に触れ、自らの考え

を再構築する機会を設けたことが、学生の思考力や実践的なスキルを向上させる一因となっていたと考える。

アンケートの自由記述で「授業で良かったと思う点」の内容を一部抜粋し記述する。

1．グループワークが豊富で意見交換ができたこと
2．ロールプレイングを通して、実践的なコミュニケーション技術を学べたこと
3．レジュメが簡潔で見やすく、内容が入ってきやすかった点
4．精神看護における対象者に対する様々な関わり方や看護課程を実践形式で取り組んでいたので、実習でも役に立つと感じた点
5．先生が細かく教えてくれる

「課題を発見し探求する力がついたか」の質問においては評価が最も低かった。

5. 改善のための努力

前項で述べたように、授業評価アンケートで高い評価が得られた取り組みを発展し、比較的低い評価については分析を続け改善策を検討し対応していく。

・「課題を発見し探求する力」についての改善
①学生がより具体的な課題設定に至るような問いかけをし、自発的に課題を見つけ深く考える習慣を促す
②知識の獲得だけでなく、課題解決に向けて自分の考えを形成できるような導き
③グループワークなどを通して、活発な意見交換の先に課題を深く掘り下げ、主体的に探求する時間を確保する
④学生の探究活動をサポートできるよう、教員からの問いかけの質の向上や、学生の考えを一歩深めて探求に結びつくようなファシリテーションをする

6. 今後の目標

1）短期目標

（1）教育成果の評価方法を検討する。

授業評価アンケートのみならず、学生がどのような学びを行っていたか等を研究的視点で分析する。

（2）研究活動や学術活動、地域精神医療保健活動に貢献する。

精神看護学に関わる研究活動、学術活動を通し、新たな知見を学生に伝えることで質の高い看護師の養成に繋がるようにする。また地域精神医療保健活動への貢献する姿を見せることも学生が自己研鑽し続けることへの教育に繋がる。

2）長期目標

（1）教育成果を研究的に分析し、学術集会および学会誌等で公表する。

（2）研究活動を通して得た知見を教育内容に反映する。

【添付資料・参考資料】

シラバス（https://sums.ac.jp/download/department/nursing_syllabus.pdf にて公開）

2025 年度授業評価アンケート